慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	E・バウムガルテン著, 生松敬三訳 マックス・ヴェーバー : 人と業績 ; パウル・ホーニヒスハイム著, 大林信治訳 マックス・ウェーバーの思い出 ; 安藤英治著 ウェーバー紀行
Sub Title	Eduard Baumgarten, Max Weber : Werk und Person, 1964, Tübingen, übersetzt von K. Ikumatsu ; Paul Honigsheim, On Max Weber, trans. Joan Rytina, ed. J. Allan Beegle and William H. Form. 1968, New York, trans. S. Ohbayashi ; Eiji Ando, A tour of the study on Max Weber, 1972, Tokyo
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1972
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.65, No.10 (1972. 10) ,p.681(61)- 683(63)
JaLC DOI	10.14991/001.19721001-0061
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19721001-0061

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

れらは，Verzeichniss Ältere Nachlässe und Bestände から知ることができる。Rose Hilferding の手紙も保管されているが，ここでは Rudolf のもののみをとり上げる。Nachlass 類は種々に分類されており，その分類ごとに見てゆく必要がある。(〔 〕内は，カセット又は分類内の研究所ナンバー。)

Nachlass Carl Giebel (Kassette I)

〔13〕 1929年2月1日付 Giebel あて手紙，Berlin W. 66, Wilhelmplatz 1. タイプライターによる。

Nachlass Hermann Müller

〔38〕 1928年7月19日付，ヘルマン・ミュラーあて手紙（研究所は8月としている。）

〔39〕 8月29日付〔年号不明〕，ヘルマン・ミュラーあて手紙

〔40〕 ヘルマン・ミュラーあて手紙，年月日不明。

Aus dem Nachlaß von Dr. Max Quark

〔50〕 1925年10月5日付，クヴァルクあて手紙

Verschiedene Originalbriefe und Dokumente

〔42〕 1941年2月5日付手紙，ヨーク〔？〕あて。

以上6通である。しかし，R. Hilferding に関するものとして，次の2通がある，とされている。

Nachlass Dittman (Kassette II.)

〔151〕 クララ・ツェトキンのディットマンあて。1912年9月30日付手紙。

Aus dem Nachlaß von Dr. Max Quark

〔50〕 ハインリヒ・クーノーのマックス・クヴァルクあて，1924年3月1日付手紙。

（補注） ヒルファディングの全著作目録として，拙稿 Bibliographie über Rudolf Hilferding（日本社会事業大学研究紀要，第20集所収）を参照願いたい。

（日本社会事業大学専任講師）

書　評

E・バウムガルテン著，生松敬三訳

『マックス・ヴェーバー，人と業績』

(Max Weber: Werk und Person. Dokumente ausgewählt und kommentiest von Eduard Baumgarten. 1964, Tübingen, Zur Interpretation von Werk und Person)

パウル・ホーニヒスハイム著，大林信治訳

『マックス・ウェーバーの思い出』

(Paul Honigsheim, On Max Weber, trans. Joan Rytina, ed. J. Allan Beegle and William H. Form. 1968, New York.

安藤英治著

『ウェーバー紀行』

ここにとりあげた3著は，最近の Max Weber 研究のなかでも，きわめてユニークな個性的なものであり，また相互に共通する側面をもっていて，いやしくも Weber 研究に関心をもつ者であれば興味深いだけでなく，これらを読む者は誰しもある種の感動をうけるにちがいない。Weber 研究としては，初歩的な段階にある筆者は，この3著をよんで，批判などということではなく，いわば読後感ともいうべきものを書きつづるにすぎないことをあらかじめおことわりしておこう。

最初の Baumgarten の著作は，訳者の生松教授が，その「訳者あとがき」で書いておられるように，厖大な E. Baumgarten の Max Weber 研究の第3部および年表を訳出したものである。そしてこの第3部は，「第1部および第2部をふまえて，Baumgarten が，Weber の学問，思想と人間的諸側面に加えた評訳である」といわれる（244—245頁）。そしてその内容は，

第1章　その業績の体系性と道具だて

第2章　伝記のためのいくつかの視点と資料

から成っており，第1章においては，史的唯物論をめぐるマルクスの批判とその継承の問題，理念と利害におけるマルクスとニーチェとの関係，官僚制とカリスマの問題および社会科学の方法をめぐる問題がとりあげられ，第2章においては，この世紀の巨人がその生涯にあらわれたさまざまな問題といかにとりくんだかが，社会主義，反ユダヤ主義，国家，権力などの諸状況，ならびに彼をとりまく友人と敵対者，同僚たち，近親者たち，Weber の病気，哲学，運命と死などを通じて克明に語っている。最後の年表は，これらの諸問題を理解するのにきわめて有益である。Weber にも直接接し，身近かな人とも交友があっただけに Weber 理解は深く，残された部分の邦訳が期待される。

ホーニヒスハイムの著作は，

＊マックス・ウェーバーの思い出

＊マックス・ウェーバー

＊社会科学者としてのマックス・ウェーバー——記念のための言葉——

＊アメリカの精神生活におけるマックス・ウェーバー

の4部から成っている。

この書物は，ミシガン州立大学社会学部の J. アラン・ビーグルおよびウィリアム・H・フォームの両氏が，その序に書いているように，ドイツからの政治的亡命者であった Honigsheim による Max Weber の回想であるが，たんなる個人的な想い出ではなく，Weber を中心に自然に出来上ったアカデミックなサークルや，彼と交友のあった，あるいは敵対関係にさえあった人々との関係を中心とする回想であるところに特色がある。その領域は，ハイデルベルクを中心に，経済学や政治学，法律学，社会学，民族学，哲学や歴史そしてさらに芸術や宗教におよびまことに広はんな分野の人々との接触について記録し，そうした記録を通じて，Weber の人格および学問そのものを語っているのである。

安藤英治教授の「ウェーバー紀行」は，日本人としてはじめておこなった Max Weber の1864年，生誕から，1920年その死に至るまでの生涯について，この偉大な学者にゆかりの地の訪問および親しく接した人々にたいするインターヴィユの記録である。読者は，本書によって何よりも Weber にたいする著者安藤氏の理解の深さと敬慕を読みとることができる。

Ⅰ　プロローグ

Ⅱ　東独のウェーバー

Ⅲ　ウェーバー成年に達す

Ⅳ　苦悩のバシリカ

Ⅴ　アルト・ハイデルベルク

Ⅵ　戦争・革命・ウェーバー

Ⅶ　エピローグ――ウェーバーここに眠る――
附録　キリストの大地

筆者は，最初，出版年月日の順に，Baumgarten から Honigsheim，そして最後に安藤氏の書物を読んだのであったが，読み終った今は，逆に安藤氏の著作から読みはじめるのがもっとも適当であろう。さて，上掲の目次をみれば明らかなように，この3著は，ひとつの共通した特徴をもっているように思われる。すなわち，Max Weber という巨人の業績を，たんに業績自体の評価のなかで明らかにするのではなく，むしろ，その人格，あるいは人間性を通じて，Weber の現代史において果した役割を追求しようとする姿勢が，著者たちに熾烈に意識されているのを感ずることができる。

安藤氏の「紀行」は，Weber の生涯を眼と耳で確かめようとするまことに精力的な見聞録であり，氏の Weber にたいする尊敬の念が行間ににじみ出ており，「ウェーバー巡礼」にふさわしい内容である。そしてこの紀行の途次に出あうさまざまな人物や風俗などのくわしい描写は，読者を楽しませるにちがいないし，一気に読み通すことのできる好読物であるとともに，ユニークな Weber 伝でもある。

Weber がその最晩年，教壇にたったことのある Wien 大学では，Max Weber の名前を知る者はほとんどいないという（11頁）。日本では，少し経済学や社会学を勉強した者で「Max Weber の名を知らない」と云ったら恥になろう。この差異は一体どこからくるのであろうか。安藤氏が失望したのはよくわかる。しかし筆者は，「東独のウェーバー」を大変興味深く読んだ。この部分は一部，雑誌「思想」に掲載されたこともあるが，何よりも東ベルリンとドイツ民主共和国の状態を伝える記述は新鮮で迫力があるが，とくに，これは，本書全体について云えることであるが，外国の研究者にたいして，ヨーロッパの人たちがきわめて親切な態度であることを著者が度々のべていることであることが読者にも伝わってくるような気がする。Weber の遺稿のうち，第3の部分20巻が Merseburg に保存されているほか，散逸もしくは紛失してしまっているのは惜しまれる（42―43）。

安藤氏の著作のうち，成年に達した後の Weber についての描写は，Baumgarten の第2章と照らしあわせて読むと興味深い。とくに安藤氏のリヒトホーフェン夫人との会見によって語っているところは，Weber のあまり知られていない人間的側面を知る上に重要であり，Baumgarten 氏およびザリーン氏との会見とともに重要である。

安藤氏の「紀行」がおそく出たため筆者は Honigsheim の「想い出」を先に読んだが，名前を知らない人物が出てきて困った。この書物はまた，Weber についてきわめて博識であり，教えられるところが多い。Honigsheim の著作だけでなく，この3つの労作全体に漲っている Weber にたいする親愛と崇拝の感情の根底には，人間としての Weber の生き方にたいする強い共鳴があることはいうまでもないが，それはつぎのようないくつかの問題に要約することができるのではなかろうか。すなわち，たとえば教授資格審査の問題にたいして Weber がとった公正無私な態度，――それは，われわれに「職業としての学問」のなかにのべられている倨傲の意味を考えさせる――，つぎに，肉親との関係の微妙さ，妻 Marianne，伯母 Ida，Baumgarten，父 Max，母 Helene，そして弟アルフレートや妹リリーとの間の特殊な関係，そしてそれと関連して，遺伝的な体質的欠陥，精神的な極度の緊張と学問への超人的な精進，そして第3に，交友関係における極度の潔癖さ――フリードリッヒ・ナウマンやヤコブ・ブルックハルトに対する関係と友人トレルチュとの絶交，ポーランド人，ロシア人およびユダヤ人にたいする親愛の感情とこれにたいする一種の畏怖の念，ロシア革命にたいする熱烈な関心と官僚性の危惧，そして最後に，ドイツ民族と国家を危殆におとしいれるような力との対決――Liebknecht や Rosa の Spartakus Bund への危惧，こうした問題を強烈に意識させるものを，これらの諸業績はもっている。

わが国では，何故に Weber 研究がこのように盛んなのであろうか。とくに最近のわが国の精神状況には，Weber の提起した問題を徹底的に考え抜かない限り，解決しえない何かがあることが次第に明らかになってきたからではなかろうか。それにしても Max Weber とは一体何者であろうか。彼の死後半世紀たった今日，彼の全貌は次第に明らかにされようとしている。その人格と学問とが離れがたく結びついている Weber の生涯を知ることは，たんに偉大な社会科学者の業績を認識するにとどまらず，19世紀末から今世紀初頭にかけてのヨーロッパの世界が直面した問題の規模の大きさと根底の深さを探求することにもなろう。そしてその場合，いままで知られなかった Weber の生活そのものを理解することは，激動の時代に生きる知識人としてのわれわれにとって，きわめて重要なことである。

従来，わが国の社会科学者の一部には，思想家の人

間的側面を伝える伝記的研究が不当に軽視されてきた傾向がある。マルクス主義の研究は，経済学や哲学の面から非常に盛んであるが，Marx その人の生活そのものについて，その思想とのかかわり合いにおいて問題にされることがあまりにも少なかった。都築忠七氏の傑作（Ch.Tsuzuki, Life of Eleanor Marx, Tragedy of a Socialist, 1968, Oxford Univ. Press）の如きは，実に例外にすぎない。

Weber の思想や学問を理解する上に，この3著はきわめて多くのものを教えるものとして，必読の好文献である。

（バウムガルテン氏，1971年刊，福村出版，B 6，246頁，800円，ホーニヒスハイム氏，1972年刊，みすず書房，B 6，244頁＋xii，950円，安藤英治氏，1972年刊，B 6，237頁，550円，岩波書店）。

飯　田　　鼎
（経済学部教授）

市川弘勝，岩尾裕純編著
『70年代の日本中小企業』

(1)　本書は，四年前に刊行された『現代日本の中小企業』（新評論刊，1968年）と同じく，財団法人政治経済研究所での中小企業研究会の共同成果であり，続篇である。前書が，日本経済の「高度成長」過程における中小企業問題の総括的な分析とすれば，本書は，国際通貨危機下における世界経済の諸矛盾の激化の中での日本中小企業の諸問題についての分析であり，1970年代の展望である。内容を紹介すれば，以下のとおりである。

序　章
第一章　七〇年代の中小企業問題
第二章　中小企業理論の再検討
第三章　中小企業経営の構造変化
第四章　七〇年代の下請制の構造変化
第五章　中小企業の労働（力）問題
第六章　中小企業の流通問題
第七章　中小企業政策の現状と課題
第八章　七〇年代の中小企業問題の展望

各章は，別々の著者によっており，かならずしも，見解の厳密な一致はないが，本書第二章の佐藤芳雄氏の言葉を借りれば「近代化批判論」の立場にあることにおいて一致していると思われる。そして，本書は，その立場から，個々の問題の専門家を結集し共同研究を通じて総合的・多面的分析を第一に目ざしたものと言えよう。

(2)　次に各章の内容を簡単に紹介しておきたい。

序章（岩尾裕純氏執筆）。ここでは，現時点での中小企業問題が次のように総括されている。1960年から1970年にかけて，日本経済の「高度成長」とともに，独占体，巨大企業の高蓄積は著しく，それは中小企業に大きな変化を与えた。すなわち，小零細企業の一時的な減少とその後の著増であり，また中小企業と大企業の賃金格差の縮小であり，下請制の変化である。これらのことは，中小企業群におびただしい数の増加とはげしい競争をもたらし，その一部に資本蓄積を，圧倒的な部分に不安定な経営を与えることになった。政府は，このような中小企業に対し，いくつかの処方箋を示すけれども，それらは独占体や大企業のための「新しい形態をとった古い要求にほかならない」（14頁）。それゆえ，岩尾氏は，真に中小企業の経営を守る途は，自主的・民主的協同化であり，そのための総合的な計画と指導，資金的・財政的援助等の要求であり，そしてこれらのことを可能にさせるためには，革新的な自治体や政府が必要であると言う。その意味で岩尾氏は「中小企業問題は，経営問題あるいは経済問題であるだけではない。それはすぐれて政治問題なのである」（14頁）と強調する。

第一章（中山金治氏執筆）。中山氏は，まず第一に，戦後日本資本主義の急速な発展過程は，独占資本の復活・強化を主軸とする運動であり，国際資本主義におけるわが国の地位を飛躍的に上昇させていく過程であったことを強調する。「ところが，一九七一年八月のニクソン声明にあらわれたアメリカ資本主義の動揺は，国際資本主義間の矛盾を暴露し，ひいては，戦後日本の成長メカニズムをも根底的危機に立ち入らせた」（16頁）。すなわち，日本資本主義の蓄積方式たる「低賃金利用による従属的な加工貿易方式」（16頁）が，一方でアメリカ側からの資本自由化の要求によって，他方で東南アジア側からの特恵関税供与の要求によって，破綻してきた。そしてこのことは，従来の「高度成長政策」の一定の手直しを必要とさせることとなり，その方向は，従来の貿易中心から，海外投資をも含む対外活動によって，一方で軍国主義化をはかるとともに，他方で，産業構造の転換＝中小企業分野の東南アジア諸国への移譲による転廃業であるということが明らかにされる。そこで，中山氏は，このことは，中小企業に対し危機をもたらす契機となり，中小企業